生涯大学「海鳴学園」大学院

ふるさと研究発表会

●とき　**平成24年11月16日(金)**
午前９時30分～11時30分

●ところ　**湖西市老人福祉センター集会室**

《研究発表次第》

1．開会あいさつ

2．学長あいさつ

3．発表

　A班　お盆について

　B班　湖西の民話について

4．指導講評

発表会資料

お盆について

A班

テーマ設定の理由

お盆は、年中行事の中でもお正月と並んで大きな行事です。

ご先祖の霊を招き、もてなし、そして送るという行いは、現在では随分簡略化されてきているようですが、毎年八月十五日をはさんでテレビ・新聞等で報道されるように、この頃は交通機関が混雑し民族の大移動などと言われています。それはお盆を故郷で過ごす人が多いからでしょう。

お盆というものは一つの区切りのように私達の心の中に生きています。私達はこのお盆行事を親や祖母・お姑さん・また先輩から教えられ、聞いたり、見たりしたことを行ってきています。そして私達もこれから次の世代が、先祖を敬い、感謝する心をもってお盆行事を続けていってほしいと願っています。

ところが、お盆の行事で行っていることの一つ一つをたずねられると本当のことははっきりわからない、知らない事ばかりで、聞いたからとか、前からやっているからというように、しっかり答えることのできないことに気がつきました。

そこで、ふるさと研究でお盆について勉強しようということになりました。お盆の起源、教え、供養の仕方などを調べて本当の意味や正しいことを子や孫に伝え、残していきたいと思いました。

これから、盂蘭盆会、慳貪の科、施餓鬼、お盆の教え、三界萬霊の回向、茄子の馬、門火、水向供養、真菰、盆踊り、灯籠、棚経について学んだことを発表します。

盂蘭盆会について

お盆の正式名称は盂蘭盆会といいます。先祖の精霊を迎え、「追善供養」をする期間をお盆といいます。地方により七月に行う所もありますが、湖西では八月に行われます。

日本での起源は推古天皇の時代、西暦六〇六年といわれていて、千四百年以上前まで遡ります。奈良の飛鳥寺で盂蘭盆会が行われたと記録があるそうです。

お釈迦様の弟子の一人、目連尊者が亡き母への供養であるとの伝説によるものです。地獄の苦しみを受けている人々をその苦しみから救いたいとの一念で、お釈迦様の教えに従い、修行僧たちをもてなしました。やがて母も、餓鬼道に墜ちた者も、同時に救うことができました。

飛鳥寺（奈良）

各地の風習、宗派による違いなど様々ですが、一般的には先祖の霊が帰ってくると考えられています。ふる里に帰り、故人を偲

ぶ、ご先祖様に供物し、灯籠に点火する。その心は変わらないもの、次の時代にも受け継いでほしいものです。

こんな言葉もあります。「今の自分があるのは、ご先祖様のおかげである」と感謝する、そしてお盆は先祖崇拝の大切な心だとも言われています。

慳貪の科

お盆行事の由来について調べている中で「慳貪の科」という言葉に出合いました。聞くのも初めて、漢字も読めませんでした。

慳貪の科というのはどのような罪かといいますと、欲張りで思いやりがなく冷淡なことをいいます。沢山の物があっても、またよい事を知っていても人には与えないで自分さえよければいいという心のことです。

慳貪の科には次のようなお話があります。

お釈迦様の十人の弟子の一人に神通力第一で、皆から大変尊敬されている「目連」という方がいました。目連のお母さんは目連を大変可愛がり、その可愛がりようは自分の子供さえ良ければいい、他人はどうなってもかまわない、というように物の道理がわからなくなってしまいました。その結果、死んで地獄に墜ちてしまったのです。

目連は地獄の責めにあっている母の様子を知り、何とか助ける方法がないかとお釈迦様に相談をしました。お釈迦様は「お母さんのできなかった事をすればよい」と諭されましたので、目連は雨季の最終日七月十五日、インドの国で雨安居といいますが、沢山の食べ物や水をお盆に盛って多くの人に施しました。そして僧侶を招いて、お母さんの成仏を祈ったというのがお盆、盂蘭盆会の始まりということです。

施餓鬼

お盆には必ず施餓鬼法要が寺院で行われることから、お盆と施餓鬼は同じと思われますが、本来はそうではありません。

お盆の由来は今までの説明のとおり、お釈迦様の弟子の目連尊者の母が餓鬼道に墜ちているのを救うため、修行僧に供養することから始まります。

施餓鬼はやはりお釈迦様の弟子の阿難尊者が修行しているところに焔口餓鬼が現われ、死の予告をすることから始まります。多くある餓鬼の中の焔口餓鬼というのは、口から火焔を吐きますので食べ物・飲み物が燃えてしまい、お腹まで届かずいつも飢えて苦しむのです。

「お前は三日の命しか無い、死んだ後は餓鬼道に墜ち、苦しむであろう。但し、その難からのがれるにはたくさんの餓鬼に食べ物を施し、仏・法・僧の三宝に供養すれば私も餓鬼の苦しみからのがれ、お前の命もながらえるであろう。」と言いました

阿難尊者はたくさんの餓鬼に食べ物・飲み物をどのように与えればよいか途方にくれ、お釈迦様にたずねました。お釈迦様は、「焔口餓鬼」の言葉を聞いて恐れ、苦しみ、悩んでいるが、その必要はない。お前が善行を重ね、功徳を積むことによって解決する。」とお答えになりました。棚を飾り、灯、ご飯、花、香、水、果物等を供え、多くの修行僧に読経して供養することを教えられたのです。この功徳により阿難尊者は八十八歳の生涯を全うしたのです。これが施餓鬼法要の由来です。

私達は米、野菜、魚、肉等生き物の生命によって、生きています。また、多くの人々の恩恵を受け生活をしています。これらのことを忘れてしまうことは餓鬼であります。

施餓鬼は読んで字の如く餓鬼に食べ物・飲み物を施すことです。普段から人間を含めたこの世に生きる全てのものに食べ物を与える心掛け、優しさが必要で、これが施餓鬼供養の本当の意味だと思います。

施餓鬼は元来、毎晩行われるものでしたが、いつしか盆行事の一環としてお盆の期間に行われるようになりました。

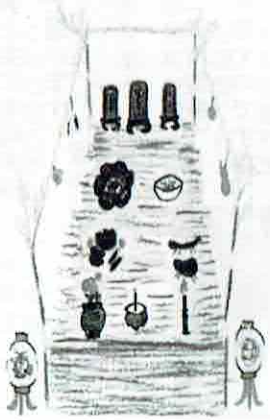
お盆の教え

核家族化がすすみ、少子化とか子供はいらないという傾向の中、お盆の行事が薄れつつあります。

お盆は何かというと、生命を絶やさない心だと思います。宗教とは何かを考える季節だと思うのです。仏教は、生きている人のためのものです。生きている人が生きながら極楽に住むには、どうしたらよいかという教えです。お盆に死者の霊がこの世に戻ってくるという信仰があり、自分を生み育ててくれた両親やご先祖様に感謝し、繋がっていく永遠の生命が触れ合う大切な時間です。

昭和一桁生まれの子供たちは、一人前の大人になるために仕込まれ、躾られ、用を言いつけらて育ったそうです。昭和三十年代には、祖父母や両親が子供に用事を言いつけるのは封建的ということと、勉強することが一番という世の中に変化しました。しかし、子供が一人前の大人になるために厳しく言われて育てられた時、それこそご先祖の賢明さや、次の時代への愛情の現われでした。家族や社会、周囲の愛情を受けながら、学校ではできない家庭の役割を果たすことです。日本の多くの人々が、お盆には故郷に戻り、家族と語らうときであり、手を合わせるときです。

この様に、一人前の大人に育てる姿こそ「お盆の心」ではないでしょうか。今、自分がこうして生きていることは、大勢の人の支えや、目に見えない支えがあるからです。見守られているから今日も無事過ごすことができたという感謝。そういう家門繁栄、子孫長久を祈る心を自然に育んだのが、お盆の行事ではないでしょうか。



三界萬霊への回向

三界萬霊とは、初めて聞く言葉でした。辞典では三界とは欲界、色界、無色界のことでサンガイと読みます。分かったことは三界とは過去、現在、未来の目に見えない宇宙よりはるかに広い世界であり、萬霊とは、ありとあらゆる精霊のことです。

回向とは故人の成仏を願い、供養することがその功徳により、私達もご先祖様に見守られ、あらゆるものに助けられ、無事に過ごせる幸せがあるのです。

お寺へ松焚きに行くと、本堂の入り口の所に大きな施餓鬼棚があり、真ん中に三界萬霊と書いた木札があります。気づかれた方が多いと思います。みなさんが目に見えない宇宙に向かって、水向けすることをしやすいように、三界萬霊という具体的なものを飾って、それに向けて内から外へ水向けされているのです。このことが三界萬霊への回向のことなのです。帰省されたお子さんやお孫さんたちと一緒に、大勢の方が水向けされていました。この供養のおかげで多くの精霊が成仏できたことでしょう。

私達に生命を与えてくださったのは、自分の家の先祖からの一流れだけでなく、多くの人々や沢山の物の助けによるものです。お盆は私達がご先祖様をはじめすべての物に感謝する大切な行事なのです。

今生きている私達が先祖供養と共に有縁無縁、三界萬霊への供養の大切さを伝えてゆきたいと思います。

茄子の馬

本来、「おしょろ様」とは、「御精霊様」と書き、お盆に帰って来られるご先祖様の霊のことを指すのですが、何故か遠州地方では、「ナスとキュウリのおしょろ様」と呼び、乗り物のことも「おしょろ様」と呼んでいます。「おしょうりょう」が「おしょろ」と、言葉が詰まって変化したものと思われます。「おしょろ様」の呼び名は、もともと九州南部の言葉らしいのですが、東海、北陸、関東などでも使われていて、結構、全国区の呼び名のようです。

お盆の十三日には、精霊棚にナスで牛を、キュウリで馬の胴体を作り猫ジャラシとかエノコロ草と呼ばれる草で尻尾をつけ、麻の茎で足を、白ササゲで目を、南天の葉で耳をつけたりして工夫しお供えします。昔、麻の茎がないときは「いちび」の茎を代用した時もあるそうです。私達が子供の頃は貧しかったからでしょうか、キュウリは使わず、「茄子の馬」を作り飾りました。現在でも地域によりナスで作った乗り物を牛・馬と両方に見立ててお供えする所もあり、地方により様々です。

お盆には有縁・無縁の仏様の霊が、馬に乗り一緒に荷物も載せて帰って来られると言われます。お盆の入りには、家に早く帰って来ていただきたいので足の速い馬を、お立ちの時には、力持ちでお土産をたくさん背負い、ゆっくり向かっていただくように牛で行くと信じられていました。最近では、もっと早く家に来ていただけるように、おもちゃのロケットや車を飾ることもあるそうです。ご先祖様を愛おしむ心が見て取れて感動しますね。

私達のご先祖様が、長い歴史の中で培い守り続けられてきたお盆行事だからこそ、ご先祖様への深い敬意とつながりを感じ、いつか自分もまた、そこに組み込まれるのだろうという家の連続性を感じます。時代と共に形が変わっても、今後も守り続けていかなければならない大切な文化・風習ではないでしょうか。

門火

門火とは、お盆の時に精霊を迎えたり送ったりするため、門口などで焚く火のことで、いわゆる「迎え火」「送り火」の総称です。十三日の迎え盆には、墓参りに行き、墓地をきれいに掃除してから「迎えだんご」や果物などを供えます。

昔は戸外が暗くなってから墓で火をつけた線香や、墓で焚いた迎え火で火をつけた盆提灯を家まで持ち帰る習慣がありました。これは、霊が家に帰ってくる際に、道に迷わないようにと行われるものです。この辺りでは松明を焚きます。また送り盆の夕方には門口で送り火を焚き、先祖の霊を送り出します。

地方によっては送りだんごや供物を川や海に流す灯籠流しを行うこともあります。新居では昭和三十年代、栄町の中央公園（新大村旅館南）に施餓鬼棚を作り、今切口の方へ霊を送り出したそうです。最近では河川の汚染を防止するため禁止されている所が多く、菩提寺に納めたり、送り火の時に燃やすのが一般的になっています。

八月十六日の夜、京都を囲む五つの山に「大」や「妙法」の字、そして「鳥居」や「船」をかたどった火が次々に点火されます。一番最初に点火されるのは東山の大文字で、左大文字の倍近い大きさがあるそうです。この五山送り火は精霊送りの意味をもつ盆行事で、特に東山の大文字山（如意ヶ嶽）の大文字が有名で、大文字焼きとも呼ばれ送り火の代名詞となっています。

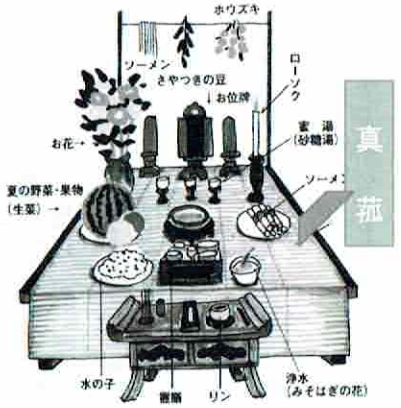
水向供養

水向供養は宗派によって「施餓鬼供養」「水施餓鬼」とも言われています。

器に里芋の葉やハスの葉をのせその上にナスやキュウリの賽の目に切ったものを盛ります。賽の目に切るというのは、百種類くらいの多くの物という意味です。新居町では十四日の朝、白ささげの味噌汁を作ります。材料は白ささげ、ごぼう、里いも、油揚げ等です。そしてもう一つの器には水を入れ、「みそはぎ」で水向け花を作ります。これは祀る者のいない無縁仏や餓鬼に水を捧げて供養するという意味合いがあるそうです。

真菰について

真菰は、沼や沢の若菰が生い茂って、一m四〇から五〇cmとなり、関東では潮来を中心に、利根の水郷、船頭小唄にも歌われ、盂蘭盆会が近づくと小舟を出して真菰刈りを行い、干して「菰むしろ」に使用します。



真菰と日本人との関わり方は神事だけでなく、仏事にも大きく関わりがあるのです。お釈迦様が真菰で編んだむしろ寝床に病人を寝かせて治療されたという仏話があり、これが日本に伝わり、真菰で編んだ「盆ゴザ」を奉げるようになったと言われております。では、なぜ真菰を使用するのかというと、「病気を治し、邪気を払う」と言われています。故人がわが家に帰られる時に、「難を持ち込まないように」ともいわれ、それで真菰を使うようになりました。

お盆を迎えるにあたり盆棚を設けて、真菰を敷いて、お供え物を供え準備します。また昔の人達は、真菰が無い時は里芋の葉とか、蓮の葉を利用し、家にあるものでお盆の準備をしました。また、物が無い時代には盆棚を迎えるにあたり、雨戸を外して真菰を敷いてお盆の準備をしたと聞いております。時代と共に今は大量生産され、スーパーなどに出るようになり、手に入るようになりました。

真菰は水質浄化の働きがあり、多くの生物に対して優れた生息環境の作用もあり、生態系の潤滑油の役割もはたしているそうです。十一月七日の中日新聞に、マコモの記事が載っていましたので紹介します。

水辺に群生するマコモを太らせ、珍しい食材（マコモタケ）は、秋風が吹く頃が旬です。磐田市篠原の水田では、地元農家の作るマコモファームが収穫に追われています。マコモの太い部分が食用とされ、タケノコのような食感と上品な甘さが特徴、食物繊維やカリウムがヘルシー食材として注目され始めている。旬の味覚として天ぷらやサラダ、炒め物、何にでも合う…。

盆棚に使うだけではなく、食材としてブームになるとよいと思います。

盆踊りについて

お盆の八月十四日、十五日の両日に行われる盆踊りは、現在は納涼や地域の親睦の意味合いが強くなっていますが、もともとの盆踊りは、お盆に戻って来た精霊を慰め、またこれを送り出すための踊りであり、れっきとした仏教行事です。一説には釈迦に母

親を救ってもらった弟子の目連が喜んで踊るようにとび跳ねた姿が、盆踊りの起源といわれています。

それが日本で平安時代に始められた空也上人の「念仏踊り」と合体し、室町時代から盆踊りとして普及しました。現在は念仏踊り型の「行列踊り」と中央の櫓の周りをぐるぐる回る「輪踊り」の二種類の踊り方があります。こうした盆踊りは信仰と相まって、古く娯楽が乏しい時代の人々の慰安行事としても大きな意味をもっていたのです。

私達の住む遠州地方では、遠州の盆行事「遠州大念仏」が毎年八月十五日の夜、浜松市中区鹿谷町の犀ヶ崖で死者の霊を慰める、乾いた太鼓のカンカンという音が、鉦・笛とともに闇に響きます。三方ヶ原の合戦（一五七二）の戦死者のために始まったとされる念仏踊りです。

浜松市内各地で「遠州大念仏」は市の無形民俗文化財で浜北区はとりわけ多くの保存会があり、慰霊の踊りを毎年繰り広げています。

ここ、新居町では八月十五日の夜七時、神宮寺において「遠州大念仏」が毎年行われています。

灯籠

灯籠とは、ここでは盆供養のための盆提灯のことをいいます。盆提灯は先祖や故人の霊が迷わずに帰って来る目印となるものです。

お盆に提灯を飾る風習は、鎌倉時代に京都で精霊迎えのため高灯籠が用いられ、庭先や門口屋根の上に高い竿をたて、その先につけて精霊の迎え火送り火の目印にしたようです。

江戸時代のころから庶民の間に仏壇やお盆の行事が普及し、ロウソクも安価に手に入るようになり、盆提灯が広く用いられるようになりました。

盆提灯は故人の冥福を祈り、感謝の気持ちをこめたお盆の供養を表わすもので、親しかった方が贈ることは古くからあり、お盆のお供えとして最高のものとされていたようです。

新盆の家では、新盆用の白提灯をお墓と玄関先に吊して灯をともします。

精霊棚の両側に切り子灯籠を吊し、家紋入の提灯、走馬灯、岐阜提灯など飾ります。お盆が終わると白提灯や切り子灯籠はお寺に納め供養します。

棚経

八月に入ると菩提寺の僧侶がお経をあげにくるのが棚経です。各家庭で精霊棚を設け、祖先を祀る習わしがあります。お寺の僧侶は檀家をまわって、棚前で読経をします。

精霊棚　棚の飾り方は写真をみていただきます。

飾り方は宗派や家によって違いがあります。

供物　お供え物はこの地方では親戚や親しい方が持ってきます。供物は、袋米、草履、扇子、野菜、果物などをあげます。ただし、袋米、草履、扇子は初盆の家のみです。

棚経の仕方は施餓鬼供養の棚をしつらえて、自家の祖先代々より有縁無縁の仏を祀り、季節の野菜、果物などの初物を供え、その前で僧侶とともに家族で読経し、周りの人に功徳します。

十五日の精霊を流したあとは七寺を参る習慣があります。起源については不詳で、初盆の家族、親戚の人達が寺を廻ります。各寺は施餓鬼棚を設け、大勢の人に供養していただくことがより良い仏様になるためのもっとも大切なことであるがために、皆でお参りをします。

棚経の僧に夕かげそへるかな　　久保田万太郎

まとめ

■**起源**　目連尊者が母を地獄の責めから救うため厳しい修行をし、そして修行僧たちへもてなしをしたことが由来。

■**教え**　日々善行を重ね功徳を積む。

■**供養**　先祖と共に有縁無縁の魂を祀る。

■**本来の意味**　自分一人では生きられない。みんなに支えられて生きている。家門繁栄、子孫長久を祈る大切な心。

むすび

ご指導いただきました金原先生、教育委員会の古畑さん、福祉センターの杉浦さん、心より感謝申し上げます。

仏教的用語の難解語等は図書館やインターネットを活用しました。それぞれの菩提寺の文献などで学び、暑い中での聞き込み等も快くお応え下さり、ありがたく受け止めております。何かと重複する部分を削除したり、また書き加えたりと文章の難しさも味わいました。

このお盆という行事、先人から教えを受けて知っているつもりでしたが、一つ一つに意味があり、より深く知識を得ることができました。形式的に手を合わせていたのが、心を込めてお参りする、そんな心の変化を語る友もいます。

私達のこのつたない研究を将来、子や孫たちが繙いてくれることがあれば、この上ない幸せでございます。

《参考文献》
・ちょっといい話　佐藤敏明　飽和図書館
・禅の友　曹洞宗宗務庁　・宝塔　法華宗・明珠　大本山総持寺
・日本大歳時記　講談社　・仏教葬祭大事典　雄山閣
・お盆のお経　藤井正雄　・七寺参りについて―考察　金原孝宣
・やさしくわかる仏教　㈱ナツメ社

発表会資料

湖西の民話について

B班

テーマ選定の理由

○神社仏閣はもとより道祖神や祠は、当時その辺りで何があったのだろうか?民話として伝わる話の真意を知りたいし興味が湧いた。

○歴史を通して、先人は様々な困難をどのようにして乗り越えてきたのか?先人の知恵を掴みたい。

調査方法

○図書館等の書籍で調べる。

○民話に出てくる対象場所や対象物を見学する。

○有識者にお話しを伺う。

図書館で参考資料を収集

民話とは?

(1)むかしむかしあるところに…で始まるのを昔話といいます。

(2)なんとか山の、なんとか池には、なんとか村で…で始まるのを伝説といいます。

(3)ほかに「村々に語り継がれていた話」を世間話といいます。

(4)また神話は、世界や人類がいかにして現在の姿となったのかを説明する象徴的な物語をいいます。

(5)こうした語り継がれていた話を全部ひっくるめて民話といいます。

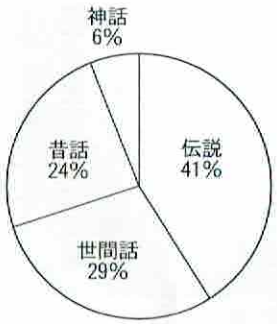
参考引用／偕成社のふるさとの民話シリーズ巻末から

■**湖西の民話の分類と分析**

〈分析〉

(1)民話の分類では、湖西の民話は、ほぼ事実に基づいているようだ。

(2)なぜ民話の件数が多いのか?湖西は宿場町や関所がある。神社仏閣も多く、農漁業も盛んな変化に富む町だった。



調査総件数：49話

【昔話】
事実かどうか分からない
【神話】
事実かどうか分からない
【伝説】
少しは事実かも知れない
【世間話】
事実である。
(信じてほしい)

■**民話の地域（舞台）の比率と分析**

〈分析〉

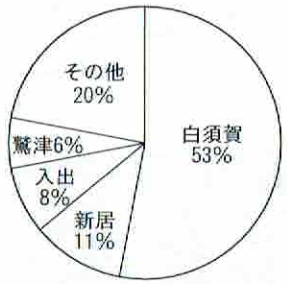
(1)白須賀地域が大半を占める。

その背景は？

白須賀は宿場町だったことから人口が多く、また人の往来も多かった。

(2)新居町も宿場町であったのに、なぜ少ないのか？

新居町は宿場町と同時に関所の町でもあったので、周囲にお上の目があり、民話の基となる話題は広まり難かったと推定される。



調査総件数：49話

■**民話の主人公の比率と分析**

〈分析〉

◆武士については

・宿場町に宿泊したり関所周辺に多く居住した。

・庶民からは上流階級と畏られ憧れの的だった。

◆僧侶について

・湖西は昔より神社仏閣が多く存在していた。

・僧侶は尊敬の対象で物知りなため、僧侶の言動は注目された。

◆動物について

・犬や猫はペットとして身近な存在。

・タヌキやキツネは人を化かすと信じられていたが、どこか親しみを感じる存在であった。

調査総件数：49話

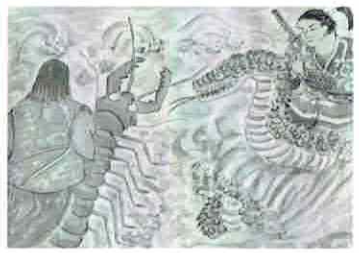
■**発表する民話は次の3話**

一、風之宮の伝説…鷲津地区

二、汐見坂の豆石…白須賀地区

三、子育て飴…鷲津地区

民話「風之宮伝説」紙芝居



■**民話「風之宮の伝説」調査結果**

表鷲津公園の一角にある風之宮神社

鳥居に刻まれた文字を拓本採取、拓影は「正七位勲七等白弁康翁　敬書」と読める。

「風之宮の伝説」の舞台は表鷲津の風之宮神社である。

・風之宮神社の祭神名は「級長津彦命（しなつひこのみこと）で

あり、風を司る豊神であり、武神でもある。

・風之宮神社の創立は棟札から承応二年（一六五三年）であるが、それ以前から鷲津大畑に鎮座されていた。

・風之宮神社は、もともとは表鷲津の見晴らしの良い山の頂上にあったが、明治十九年（一八八六年）から始まった鉄道工事により、やむなく現在地に移転された。

■**大蛇とムカデは昔から敵同士**

・日本では「太平記」の中の「俵藤太の百足退治」の物語がある。俵藤太はムカデに苦しめられていた龍神を助けて三本の弓矢を使いムカデを倒した。

・俵藤太は官軍（朝廷）の象徴であり、ムカデは逆賊の象徴である。

・ムカデは別の意味は、台風や洪水といった「自然の脅威」を表わす。

■**この民話の出所は表鷲津と舘山寺の争いだったのか？**

・以前の風之宮神社は、表鷲津の山の頂上にあった。その山の高さは入出の正太寺や舘山寺の大草山とほぼ同じであった。

・表鷲津地域と舘山寺地域は日頃から山の高さや漁場を巡ってのトラブルが時々発生しており、正太寺の出城の者（今川勢）が仲介に入っていた様子。

※民話の出所は、ここにあるようだ。

■**風之宮の伝説から私たちが学んだこと**

・どんな大きな問題（難敵）があっても諦めず、力を合わせれば必ず克服できる。

・古来より、豊かな漁場である浜名湖の自然環境をいつまでも守っていかなければならない。

・自然への畏敬の念を忘れてはならない。

民話「汐見坂の豆石」紙芝居

■**民話「汐見坂の豆石」調査結果**

・汐見坂は東海道の中で難所であったが、峠からは海が見渡せる景色の良い所。

・豆石は汐見坂が舗装される前には汐見坂の天神山の下辺りでよく拾えた。

保管されている豆石

現在の汐見坂

・豆石は石英質で直径5～10㎜の丸い石で色は白、褐色、紫等いろいろあった。形は地下水で洗われて丸くなったと考えられる。大豆によく似ており、混ざれば探すのが困難なくらい。

■「豆石」から私たちが学んだこと

・苦労した後には、必ず良いことがある。
・あまりわがままを言って人を困らせてはいけない。
・人は幸せになることや、好きなものを手に入れるのに苦労を厭わない。
・女性は昔から「光りもの」には目がない。

民話「子育て飴」紙芝居

■民話「子育て飴」の調査結果

「子育て飴」の舞台は本興寺

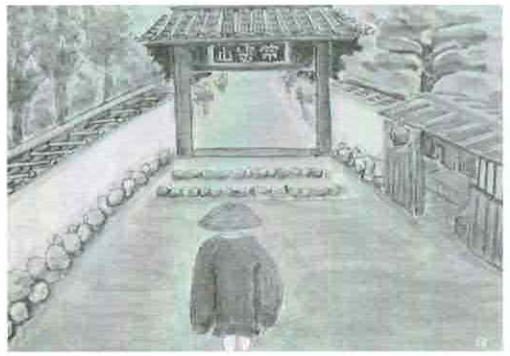
・「子育て飴」の民話は実話であり、舞台は本興寺。
・育てられた子供は、後に本興寺の第十七世住職の日観聖人となった。
・日観聖人は本興寺で信者の指導と弟子の育成にあたり、八十七歳で亡くなった。
・日観聖人は筆がたち、日観聖人が書いたお札が安産の掛軸として飾られた。円慈院蘆竹の号をもって一家を成した。

本興寺山門

安産の掛軸

■「子育て飴」から私たちが学んだこと

・昔は親はなくても子は育つ、ではないが「もらい乳」にあるように、人々の繋がりが強く、周りの人が命を大切にしてくれた。
・たとえ幽霊になっても子を育てようとする母性愛、母と子の絆は非常に強いものである。



おわりに

■参考文献

・湖西風土記文庫―祈る―
・湖西風土記文庫―語り継ぐ―
・湖北・湖西の民話と史話101話（上下巻）
・マイタウンシリーズ（鷲津、新所・岡崎、知波田、白須賀）
・もっとも長い塩の道
・女河八幡宮の流鏑馬まつり
・「史と花の里」（本興寺の歴史）